

解体の勇者の 成り上がり冒険譚

Kaitai no Yusha no
Nariagari Boukentan....



muboutotsugekimusume

無謀突撃娘



エリーゼ

ヒロインその2。
しっかり者の魔術師。
リフィーアに負けず劣らず
食欲旺盛。

ベルファスト

勇者のパーティを率いるリーダー。
性格が歪んでおり、
他者を見下している。



ユウキ

本作の主人公。役立たずとして
勇者のパーティを追放された。
得意の解体技術を駆使して
成り上がっていく。

リフィーア

ヒロインその1。
戦闘もこなす美少女神官。
ちょっと天然でよく食べる。



Main Characters....

主な登場人物

プロローグ

「ユウキ、お前は今日限りでパーティを抜ける！」

突然、勇者のパーティのリーダー、「剛剣の勇者」ベルファストからこう言われた。

僕、ユウキは混乱したまま尋ねる。

「……何でいきなり。つてか、どうして？」

「モンスター解体しかできない奴なんか、俺たち勇者のパーティには足手まといなんだ。どうか、そんな役立たずに利益を分配し続けていると、俺たちの分がとんでもなく減るだろ。わかっただ？」

僕の質問に答えたのは、「静寂の勇者」ヘルライトである。彼もベルファストの考えに同意しているようだ。

「そうよね。あなたの仕事くらい他の者でもできますもの」

続いて、「城砦の勇者」カノンが追従する。

「お前、邪魔」

「お前、無用」

残り二人、「火炎の勇者」ファラと「御門の勇者」メルも同意見のようだ。

ワイバーンの解体を終えた僕に、ゴミを見るかのような視線を向ける勇者たち。

ベルファストが僕を追い払うように言い放つ。

「もう多数決で決まってるんだ。金までは取らねえでやるから、素材と食料は全部置いて、今すぐ出ていけ」

× × ×

「はあ、どうしようか」

僕は、これからどうすべきか、少しばかり悩んでいた。

勇者パーティーとは、こっちの世界に来てからすぐに出会った。

以来ずっと、奴らの顔色をうかがう日々だった。

そんなある日、モンスターの討伐命令が下され、勇者とともにモンスターを駆逐していた矢

先――

いきなりの追放だ。

勇者たちは僕のことを使いつぱしりくらいにしか思っていないし、いつも「ゴミクズ」と罵倒していた。

そんな毎日から解放されると思うと――逆にすがすがしい気持ちになるかな。

「さて、とりあえずは……」

ひとまず僕は町に戻り、冒険者ギルドへ行くことにした。

第1章 新しいパーティ

数日後、近くの町まで戻る途中――

「ん？」

僕は視線の先に馬車を捉えた。馬車の周囲には数体のモンスターがおり、今にも襲いかかろうとしている。

「やれやれ」

僕は馬車を助けることにした。

すると、掛け声が聞こえてきた。

「ヤアツ！ ヤアツ！」

御者と商人以外に年若い少女がいる。どうやら彼女が声の主のようで、たった一人で馬車の護衛をしているらしい。

だが、その装備はあまりにもお粗末そまつだった。

戦闘経験が少ないのか、空振りすること多数。それに焦あせってさらに動き、体力を大きく消費している。

このままでは天国に行くことになるだろうな。

「助すけ太刀たちする」

僕は腰に下げていた一本の短剣――解体包丁を抜く。

相手はウルフ五体。

これならさして時間はかからない。

一気に距離を詰めると、飛びかかってくるそれらを寸前であわして瞬時に殺す。全部仕留めるのに数分かからなかった。

僕は地面に倒れていた商人たちに声をかける。

「大丈夫ですか？」

「ああ、すまないねえ」

負傷者はおらず、損害は大してないようだ。

「では、これで」

立ち去ろうとすると――僕の服を誰かが握っている。

先ほど一人で戦っていた少女だ。

外見は神官のようだが、その装備はメイスと盾。ということは、近接戦闘ができる神官戦士なの

だろうか。

だが、さっきの戦いぶりと外見から、まだ駆け出しなのは間違いないな。

「……あ、あの！ 私はリフィーアといいます！ 戦いの神を信仰している一派の一員です。まだ神の声を聞いたばかりで経験がなく、大司祭様から『旅に出よ』と言われて今回の護衛を引き受けたんですが……」

危うく全滅する寸前だった。命があっただけでも運が良いほうだろう。

リフィーアと名乗った少女がすがりつくように頼み込んでくる。

「も、もしこの先の町まで行くのでしたら、護衛として一緒に行きませんか？ お金はお支払いしますで……」

目的地は一緒のようだし、別にそれぐらいいいか。

「いいよ、護衛料は相場で。あとは……」

倒したモンスターを分配する交渉をし、半々で分けるという条件でまとまった。

さっそく馬車に乗り込むと、リフィーアが僕のことを聞いてくる。

「……えっ？ パーティから追い出されてしまった？」

「そう。まあ無理やり組まされてたし、未練もないけどね」

ちなみに向こうから縁を切られたので、責任問題になったりしない。

そっけなくしていたつもりだったけど、それからも彼女はしきりに質問してきた——のほどほ

どにあしらっておいた。

町に到着して、報酬ほうしゅうをもらった。

えっと、ひいふうみい。うん、金額は間違っていないようだ。

こっちこっちに来て困ったのは、文字の読み書きと数字の計算方法、そして通貨の種類しゆがたの多さだ。

前二つは頑張って何とかあったが、通貨が大変だった。

とにかく質が悪く、歪みゆがのある貨幣が多すぎる。文字とか印章しんしょうとかが擦すられていて、出来があまりに悪いのだ。

簡単に偽造されそうとしか思えなかったし、実際偽造されたまが物の貨幣が結構流通している……もちろんそういう貨幣は換金率が悪い。

リフィーアはまともなのを用意していた。

今さらだけど、僕がこの世界のことを「こっち」と呼んでいるのは、別の世界「地球」から来た転移者だからである。

父は指折りの狩人かりゆとで、母は大農家の跡継ぎ、祖父は優れた武道家という環境で育った僕は、父母からサバイバル術と獣の解体技術、祖父からは武芸を叩き込まれた。

そうして農家を継ぐため、県内でも有名な農業高校への進学が決まったそのすぐあと——神様に「異世界で勇者になれ！」と拉致らちされ、こっちにやって来たのだ。

それはさておき、僕が冒険者ギルドへ行こうとすると、リフィーアがなぜかついてくる。

「何でついてくるの？」

「護衛の依頼が終わったのを報告する必要があるからです」

結局、そのまま冒険者ギルドまで一緒に行くことになった。

「おい、あれ『解体の勇者』だぜ」

「ああ、他の勇者に寄生するしかないゴミか」

「一人つてことは追いつかれたんだな、いい気味だ」

冒険者ギルドに入るやいなや、明らかな侮辱ぶじょうの声が聞こえてくる。

勇者のパーティはとにかく僕の悪口を言いふらしていたので、たまにこういう奴らがいたりする。

リフィーアはとてつもなく不機嫌な顔をしていた。僕が言われているのに、何で君がそうなるんだらうな。

ひとまず僕らは窓口までやって来た。

「本日はどのようなご用件でしょうか」

僕への悪口も聞こえていただろうに、ギルドの受付は職務に専念しているようだ。いっさい感情を出さず淡々としている。

さつそく僕はいろいろ省はぶいて、単刀直入に告げる。

「パーティを抜けた。だから新しいパーティを作る」

「では、こちらの書類にサインを」

出された書類に記入しようとしたのだけど、今さら他にメンバーがいらないことに気づいた。

自分一人でもいいが……やはり誰かしら欲しい。けど、悪評が広がっている僕とは誰も組みたがらないだらうな。

ふと隣を見ると、リフィーアが笑顔で待っていた。

彼女は僕のことを嫌っていないさそうだし、能力のバランスがいい神官戦士だ。誘って損はないかもしれない。

「……あのさ。君に相談がある」

「はい。何でしょうか」

「パーティを新しく組もうと考えてるんだけど、メンバーがいらないんだ。良ければどうかかな？」

「もちろん！喜んで！」

呆気ないほど簡単にパーティが組めた。すぐさま彼女は書類に名前を書き込む。一応、リーダーを僕にしてくれたみたいだ。

ともかくこれで最低限のことは終わった。

僕はリフィーアに尋ねる。

「失礼だけど、ギルドランクは」

「10位です」

「こっちも同じ」

「そうなんですか？」

ギルドのランクは、最高位の1位から最低位の10位までである。どうやら二人とも、そこらの駆け出しと変わらないランクのようだな。

なお、ランクは様々な項目から評価される。周囲の評判、倒したモンスターの種類と数、討伐に要した期間など多岐にわたるのだ。

総合的な社会貢献度とも言えるので、ひたすらモンスターを倒すだけではだめらしい。犯罪とか問題とかを起こしたりすると、ランクは上がらない仕組みになっている。

もっと具体的に言うなら、8位までならそこそこやれる程度。6位ならなかなか頼りになる。4位だと信頼できる実力者。3位以上は完璧に仕事をこなす優秀者。さらに上となると、凡人は考えるだけ無駄ってレベルだ。まあ、大まかにこんなものだろう。

え？ 先に組んでた勇者はどれくらいかって？

他の人とほとんど組んだことがないから何とも言えないが、ギリギリ7位くらいってところだと思っ。勇者だの何だのと煽^煽てられているけど、周囲のことが見えてない奴らだし、そんなもんだ。

僕はリフィーアに尋ねる。

「どんな魔法が使える？ 回数は？」

「ヒール、ライトだけです。回数は五回です」

駆け出しにしては結構使えるな。

さつき報酬をもらったとはいえ、資金的に宿屋に泊まれるのか怪しいので、魔物を数体は狩らないといけない。

そんなわけで、僕はリフィーアを連れて町の外に出た。

できれば報酬の良い素材が採れるボアが出てきてほしいところだが——ウダウダしていると獲物が逃げるので、サクサク行くことにしようか。

× × ×

「側面に回り込んで！ できる限り頭部を狙う」

「は、はい！」

町を出てしばらく進むと、ウルフの群れと出くわした。数は五体。駆け出しではちょっと苦戦する相手であるが、問題ない。

腰から包丁を抜き、構える。

相手はこちらを警戒し、円を描きながら動き続けていた。

とりあえず僕に三体引きつけて、処理することにした。

一体目は素早く頭部を狙い即死させ、返す刀で二体目もばつさりと殺^やる。三体目はそれに驚いて

動きを止めたので、喉をかき切つて殺した。

リフィーアのほうはというと、二体のウルフに押されている状況だった。盾で何とか防いでいるが、足を噛まれそうになっている。

怪我をされると面倒なので、助太刀して一体を瞬殺。

最後の一体は残しておいた。

「はわわわ〜」

「落ち着いて、視線と動きを見て、次の行動を予測して備える。自分が動くとき相手も動くのだから」

リフィーアには戦闘のレクチャーが必要だと思つた僕は、指示は出しつつも彼女が自力で倒せるまで待つことにした。

数分後、相手の行動を観察できるようになった彼女は、ウルフの動きを先読みし、その頭部にメイスの一撃を加える。

そして、相手の動きが止まっているところを滅多打ちにして何とか倒した。

「はあはあ、やっと、倒せた」

さて、さつさと仕事をしますかね。

ここからが僕の仕事の本番だ。

「それは？」

「モンスター解体用の道具一式」

僕が取り出したのは、三本の木の棒。それらをバランス良く立て、中央に獲物を吊り上げるのだ。その他にもいろいろな道具を並べる。

僕は慣れた手つきでウルフの死体に縄をかけて吊るし、解体作業に入る。

まずは膀胱から汚物が出ないようにしてから、内臓が落ちてくる場所に大きめの桶を置いて、一気に腹を裂く。

すると、凄まじい勢いで内臓が滑り落ちてきた。

続いて、前足と後ろ足の境目より切れ目を入れ、徐々に毛皮を剥いでいく。それをしばらく行い皮をすべて剥ぎ取ると、骨に沿って各部位の肉を切り出す。

「うぶっ」

リフィーアは解体作業を見て、少しばかり気持ちが悪くなってしまったようだ。

「生の解体を見たのは初めてです」

「ああ、神官だところいうのに縁がないかもね」

僕は二体目を解体している途中だけど、話しながらも手は休めない。リフィーアも慣れてきたのか、しだいに興味を持ち出し、尋ねてくる。

「大きなまな板の上でするのが、普通ではないでしょうか？」



「そうかもね。でもこのほうが楽だし、綺麗きれいにできるんだよ」

こつちの世界では、解体技術はあまり発達していないようだ。

そういうえば、あの勇者たちもまったくできなかったな。

戦闘の際、ひたすら攻撃を打ち込むために素材がボロボロになり、ギルドで買い叩かれるのが日常茶飯事だった。できる限り良い部分を採ろうとすると、無駄だの何だの文句ばかりつけられていたように思う。

よくよく考えてみると、ここまで良い状態で解体できたのはかなり久しぶりだ。せっかくなので、切り分けた部位は汚れがつかないようにしておく。

リフィーアが感心したように言う。

「……綺麗です」

「ん？」

「あ、その、分けられた肉とか毛皮とかの状態が、あまりにも良くて……」

「このくらいできないと、家族から怒られるからね」

「ご家族はどこに？」

「星より遠い場所」

「天めに召されたのですか？」

「わからない。生きてるかどうかも、確認する方法がないんだ」

何しろ異世界に来てしまったのだ。もう諦めたほうがいいだろう。

それからリフィアは口を利かず、僕が解体するのを黙って見つめていた。

「よし、終了」

「お疲れ様でした」

解体したものは、何でも収納できる魔法のバッグに入れる。ちなみに、解体道具とかもここに入れてある。

「でも、これで終わりじゃないよ」

そう言っただけでリフィアに剣を渡す。彼女は「なぜこんなものを持たされるの？」という顔をしていた。

「これは？」

「流れた血とか内臓とかはモンスターを呼ぶんだよ。そうなるといういろいろな人が困る。だから」
地面に穴を掘って埋めるのだ。

「そこまでするのですか？」

「そうするのが、狩人のマナーだからね。まあ場所によるけど、ここは町に近いから」

二人で穴掘り作業をする。一メートルほどの深さまで掘り、そこに内臓やらを全部入れてしっかりと埋めた。

「さあ、町に戻ろうか」

「はい」

一仕事終えたのもあって、二人そろって晴れやかな笑顔だった。

町に戻った僕たちはギルドへ赴き、解体したウルフの素材を買い取ってもらった。

「はい、これが換金額です。お確かめください」

そうして布袋に入ったお金をもらう。

「結構、ありますねえ」

リフィアは、たかがウルフ五体程度なら大したお金にはならないと思っていたようだ。それで実際受け取ってみて、その金額に驚いていた。

「てか、普通の倍はありますよ。これ」

「そりゃあ、下手くそな手順で皮を剥いだり肉を分けたりしたら、値段はかなり下がる。そのまま持って帰ったほうが高いときだってあるんだ。でも、そのぶん手間賃を取られるし、血抜きとかすぐにしないと肉の味は落ちる。それをすべて完璧にやったから、この報酬なんだよ」

「そんなに値段変わるんですか……」

「変わる」

たかがモンスターの解体と侮るなかれ。

素人と熟練では、腕の差が如実に出てしまうのだ。

解体手順をしつかり守らないと価値は大幅に下がるし、場合によっては貴重な素材がゴミにもなってしまう。

先の勇者パーティは解体をすべて僕に任せていたから、わからないかもしれないけど。

「多くの人が血抜きくらいしかできないし、すぐに腐らせてしまうからね」

「へえ〜」

そんなのを買い取れと迫ったところで、無理なのは当たり前である。リフィーアと会話をしていると突然――

グウ〜、と腹の音が鳴った。

僕のではない。

「ア、アハハ。緊張が解けたから」

そういえば、食事を取るのを忘れてたな。

それじゃ、得た糧かてを消費して、未来に備えるとしましょうかね。

僕はリフィーアを連れて、食堂へ行くことにした。

× × ×

「ねえ、ちょっと」

「はい？」

「そんなに食うの？」

「……ごめんなさい」

食堂で最初に料理を頼んだときは、二人とも普通のランチセットだった。だが、リフィーアが何か気にし出したのだ。

ここのメニューは少しボリュームが多い。食いきれないのか？ 小食なのか？ と考えていると――

「足りないです」

リフィーアは細い声で言った。

それで適当に追加で頼めばいいと許可を出すと、結構な料理を注文したわけで……

「人は見かけによらない、っていうけど」

「神殿では決まった量しか出されないから、不満で不満で仕方なくて」

テーブルには、互いが注文した料理が並んでいる。

だが、その量は倍以上違っていた。

「やれやれ」

「すみません、ほとんどの仕事を任せてしまったのに」

「その話は後々。今はとにかく食おう」

そうして料理に手をつける。

リフィーアはナイフとフォークを忙しなく使い、料理を口に運んでいた。あつという間に皿から食べ物が消えていく。

「ふっっ」

「ご馳走様でした」

二人そろって水を飲む。

僕の目の前には満足した笑顔の美少女がいるけど……甘い絵面ではないな。

「これだけの量を食べたのは久しぶりです」

「神殿の食事って少ないの？」

「そういうわけじゃないんですけど、大食いは良くは見られませんね。おかわりなんてもつてのほかです。出された範囲で終わらせるのが普通ですから」

神殿により教義は変わると思うけど、確かに神様の前で他人よりも遥かに量を食べたら……欲深いとかわれそうだよな。

しかし、この大食い娘を食わせていくとなると……

少し軌道修正しないとまずいな。できる限り労力が少なく利益が多い方法を探らないと、路頭に迷うかもしれない。

食事を終えて席を立とうとしたんだけど、リフィーアは座ったまま他のテーブルに置かれている料理を見ていた。

はあ……そういうことか。

仕方ないと諦めて「追加を頼んでもいい」と言うと、リフィーアは笑顔でいっぱいになった。今回の食事代、取り返せるかなあ。少し心配になる。

食事を終えた僕たちは、冒険者ギルドに行き、依頼を受ける手続きをした。

リフィーアが不思議そうに尋ねてくる。

「ネズミ退治、ですか」

「うん」

こちらの世界でもネズミは下水道などにかなり多くいて、不衛生だ。

体が大きく動きが機敏であるうえに、病気の原因にもなる。そのため駆除依頼は多く報酬も悪くないのだが、誰もやりたがらないのだ。

「やり方しだいでは短時間で稼げる。これほど効率のいい稼ぎはないしね」

「冒険者とは、そこまでするものですか……」

「仕方がないでしょ。数が多すぎて誰も手が回らないんだから」

「神官なのにネズミ駆除とは……」

思うところはあるだろうが、彼女が大食いすぎてこのままだと数日で破産してしまう可能性がある。依頼を選り好みしている時間はないんだよ。

まずは駆除用の薬を作るために市場に行き、猛毒薬と小麦粉などを買った。蜂蜜を加えて練り込み、球体状のものをいくつも作る。

それを手で触れないように布に包むと、問題の下水道に行った。

「うわあ」

リフィーアはそこらじゅうにいてかいネズミを見て、完全に引いている。

「これを置いて」

さつき作った殺鼠剤を彼女に渡す。もちろん手袋も忘れずに。

「これは？」

「ネズミの餌であると同時に、彼らを殺す猛毒食でもある」

二人でネズミがいると思われる場所に殺鼠剤をいくつも置いてから、下水道をあとにした。

——翌日。

「ヒィィ」

再び下水道に行くと、ネズミの死体が至るところに転がっていた。

その数は百を超えるだろう。

「はい。これで、殺したという証拠にするため、尻尾を根元から切って」

僕はリフィーアに、大きな鋏と手袋を渡す。

「急いで切り取って。終わったのはこっちで袋詰めにするから」

「は、はい」

大量のネズミの死骸を処理することに没頭する。リフィーアが死骸から尻尾を切り取っていく、僕はそれを布袋に入れていく。

「ネズミの死骸はどうするのですか？」

「一箇所に集めて油をまき、一気に焼き払うって方法もあるけど……なにぶん数が多すぎる。だから今回は、森に捨ててモンスターに処理させる」

モンスターに食わせるのはあまり良い考えとはいえないけど、そのほうが手間がかからなくていい。

すべてのネズミの死体をくまなく回収し、二人で大量の布袋を持って森まで行き、次々と投げ捨てる。

「これで終了ですか？」

「まだまだ。あの様子だと、警戒して食わなかったり気づかなかつたりするかもしれないから、モンスターが食べるのを確認しないとだめ。放置されたら腐っちゃうしね」

うへへと、リフィーアは嫌そうな顔を隠さなかった。

「それが終わったら、冒険者ギルドに駆除した証拠を持って行って換金してもらおう」
塵も積もれば何とやらだ。

とりあえずこれで食いつなぐことはできる。

もう気にする理由も価値もないが、あの勇者という残念な連中はどうなってるのだろうか。彼らのことが、僕の頭をほんの少しだけよぎった。

× × ×

一方その頃、勇者パーティはというと――

「よっしゃ、ワイバーンを狩ったぜ！」

あれから勇者たちは仲間を三人増やして、モンスターを狩っていた。

それは傍目から見れば、順調そのものだったが――

「そんじゃさっそく解体を……」

リーダーのベルファストが仲間にもう指示を出すと、全員の動きが止まった。

そう、重大な問題に直面することになったのだ。

「誰か、解体できる奴はいるか？」

全員が無言となる。

ベルファストは額から冷や汗を流す。

このパーティには、戦闘ができる者はいてもモンスターを解体できる者はいなかった。そのことに今さらながら気がついたのだ。

「だ、誰もいないのか！」

「「「「やったことない」」」」

これだけいながら、誰もその技術を持っていなかった。

収納できる魔法のバッグはあるが、こんな大きな獲物はいれられない。部位を切り離し、持ち運べるようにしないと入らないのだ。さらに血抜きをしないと、換金額が大幅に下がってしまう。

それで仕方なく、自分たちで解体することにしたのだが……

「「「ど、どこから手をつければいいの？」」」」

またも全員で考え込んでしまった。

思い返してみると、彼らはユウキにすべて押しつけて自分たちは何もせずしていた。なので、解体をどうやるのかさえ知らなかった。

解体など誰でもできると思いがっていたのだ。

「と、とにかく。やってみよう」

こうしていても始まらないので、とりあえずやってみることにした。

——一時間後。

「ハァハァ」

それぞれが剣やら何やらを持ってやってみたが……結果は最悪だった。

頑丈な鱗や皮はそう簡単に切れず、突き刺すのも一苦勞。切り裂くだけで重労働だ。

骨のつなぎ目はさらに難儀で、逆に刃を傷めるだけだった。上手く切り出そうとしても思い通りにならず、部位をボロボロにしてしまう。

結局、ワイバーンは無価値な残骸になってしまった。

ベルファストが叫ぶ。

「クソ！ クソクソクソ！ なんでこんなふうになっちゃうんだよ！」

「……」

目の前の残骸を見て、全員が押し黙っていた。

「あ、ある程度は採れましたので、一度換金に行きましょう。それより食事にはませんか？」

カノンの言葉に皆が頷く。

全員に焦りが生まれていたが、現状ではどうしようもない。冒険者ギルドで解体ができる仲間を見つけることにして、皆、無理やり納得した。

「そ、そうだな。とりあえず腹ごしらえをしようか」

そしてそこで、さらなる問題が判明する。

「誰か！ 誰か料理を作りなさい」

カノンがそう言っても、誰も手を挙げなかった。

「こ、これだけいて誰もできないの？」

メンバーの誰もが料理ができないという最悪の事態に直面する。いつもはユウキにすべて任せていたのである。

そもそも、誰も包丁や鍋を持っていなかった。火をおこそうにも種火や薪がない。

全員がただの戦闘馬鹿であったために、ユウキの重要性を理解していなかったのだ。

「……」

皆の顔に絶望が浮かぶ。

「と、とりあえず町まで戻りましょう。大急ぎで行けば、日暮れには着けると思いますが……」

カノンの言葉で町へ戻ることにしたのだが……

「くそっ、ウルフの群れだ」

モンスターの群れに不意打ちされてしまう。

なぜそうなったか。

その理由も、ユウキがいなかったからである。

ユウキはいつも周囲の索敵と警戒をし、不意打ちを防ぎ、退路の確保を人知れず行っていた。そ

れをする人間がいなくなれば、こうなるのは必然だった。

急ぎ足で来たため、疲労と空腹で力が入らない。それに加えて奇襲まで受けては、勇者といえども戦闘能力は格段に低くなる。

何とか振りきって逃げた。

負傷者は出なかったが、勇者としての自信がボロボロになるほどのダメージを心に負っていた。

予定より遅く、命からがら町にたどり着く。開いてる店はほとんどなく、買ったのはポソポソした売れ残りのパンと水だけだった。

「クソッ、勇者である俺らが何でこんな貧相な食事を！」

いつもなら温かくて美味しい料理が食べたのに。

愚痴ぐちが出てしまうのも仕方がなかった。

その日は疲労と空腹に耐えて宿屋で休むことにし、翌日冒険者ギルドへ行って、換金と仲間探しをすることにした。

「はあ！ 何でこんな値段なんだ。安すぎるぞ!？」

「そう言われましても。私どもではこれが精一杯です！」

先に出したユウキが解体した素材は、だいぶ良い値段がついた。だが、あとに出した自分らが解体した素材は、その十分の一以下の値段だった。

「俺らは勇者ぞろいのパーティだぞ！」

あまりの値段差に、ベルファストが怒りを露あらわわにしていると、職員がその理由を説明し出す。

「先に出された素材……これはまさに完璧な仕事です。必要な部位をまったく損きなうことなく筋すぢに沿って切られ、無駄な部分がどこにもありません。これほど完璧な解体技術を持つ者など、まずありませんでしょう。だから、相場より色をつけて買いましたが……あとに出された素材は最悪そのものなのですよ」

それからギルド職員は、その素材がいかに最悪かについてじっくり伝えた。

「……というわけでして、前者と後者ではあまりにも技術が違います。使える部分をまるで子供のお遊びのようにグチャグチャにしてみましたこの素材など、値段がないも同然。それでも不足しているため値段はつけましたが……」

すると、ベルファストは声を上げる。

「俺らは勇者のパーティだぞ！ 相応の値段をつけろ」

「この二つの素材、仕事を行ったのは明らかに別人でしょう。同じような値で買い取りをするのは不可能ですね」

「ああん、ざけんな！ ただへーこらするしかできない職員風情が！」

ベルファストはついに言っではいけない暴言を吐いた。

ギルド職員に対してありえない態度に、周囲の冒険者たちまで眉をひそめる。

ギルド職員は内心で毒づく。

(こいつら正気か？ 世界中で冒険者へ仕事を斡旋^{あつせん}している冒険者ギルドに向かってなんて態度なんだ。我が強い連中だと聞いていたが、ここまで酷いとは)

以前からそうした噂は立っていたが、勇者とは名ばかりの乱暴者でしかなかった。

実は、彼らへの対応策は出されていたので、ギルド職員はそれを遂行することにした。

「ご不満なら、ギルド支部長と話してください」

「そうだ！ ギルド支部長はお前とは違い、無能ではない。すぐに俺らが正しいことを理解してくれるぜ」

ベルファストの暴言にギルド職員は怒りがこみ上げてきたが、表情には出さずギルド支部長の部屋に案内する。

勇者たちも職員も、怒りが爆発寸前であった。

「ギルド支部長、勇者のパーティが話があるとのこと……」

「あら、何の用件なの」

ギルド支部長は、茶色のロングヘアで長身の壮麗^{さうれい}な女性である。

ベルファストがさっそく抗議する。

「ギルド支部長、聞いてくださいよ！ この職員が不当に低い金額を提示したんです」

ギルド支部長は目を細め、職員に聞いたです。

「どうということ？」

「はっ、同じワイバーンの素材が持ち込まれ、一つは完璧な状態を保っていましたが、もう一つは何も知らない素人が無理やりやったかのように酷いものでした。そこで、買い取り額を大幅に減らす提案をしたのですが……」

ギルド職員が両方を台の上に置くと、ギルド支部長は一目見て、大きくため息をついた。

「なるほどね。これは一目瞭然^{いちもくりょうぜん}だわ」

「そっついでしょっつ」

勇者とギルド職員の声が重なる。どちらも確信を抱いているが、その中身は逆である。

ギルド支部長が、ベルファストに尋ねる。

「そういえば、あなたたちのパーティにはユウキという人物がいたと聞いていますが、彼はどこに？」

「あいつは無駄飯食^{むだはんじく}らいなので追い出しました。その代わりに、新しく優秀なメンバーを入れていきます」

自信満々に答えるベルファストだったが、それを聞いてギルド支部長は、再び呆れたようにため息をつく。

「……そう、そういうことなのね。わかったわ」

ギルド支部長はフンフンと頷きながら、なぜか笑みを浮かべていた。

やはり職員が不正をして素材を安く買い叩いたのだ、勇者たちは確信を強めていたが……ギルド支部長が言い放つ。

「この勇者たちのパーティの順位を一つ……いいえ、二つ下げなさい。こんな何もわかってない馬鹿どもに、今のような評価を与えるなど冒険者ギルドの恥。すぐさま書類を書き換えなさい」

「！！！！」

勇者たちは戦慄し、ベルライトが声を上げる。

「お、おい！ いったいどういうことだよ！ せ、説明しろ！」

「説明？ そんなのわかりきっていると思っちゃったが……説明が必要ですか？ 二度は言わないからしつかり聞きなさい。まず冒険者ギルドの大鉄則として、パーティメンバーが替わった場合、それに合わせて順位が上下する。これは、最初に説明したはずですよ」

ギルド長の言葉に、ベルファストが小馬鹿にしたように言う。

「はあ？ たかが解体ぐらいしかできないクズが抜けたところで評価が下が……」

「下がるんですよ！ ギルドのランクは討伐したモンスターの強さによって決まると思われがちですが、実際はそうではありません。素材を持ち込むことで、どのような利益が生まれるか、社会的な益の循環をどう促すか、他者にどういう益を与えるのか、そうしたことが重要なのです」

一気に捲し立てるギルド支部長に、何も反論できない勇者たち。

ギルド支部長はさらに言い募る。

「あなたたちの装備は誰が製作していますか？ 破損した装備の整備などを誰がしてくれますか？ 回復用のポーションや解毒剤は誰が作ってますか？ その素材をどこから集めてくれますか？ して何より、そうした人たちとの交渉は誰がしてくれましたか？」

勇者たちは今さらながら、その手の交渉は全部ユウキに押しつけていたことを思い出す。

カノンが恐る恐る言う。

「……だ、けども、ユウキが雑用をやるのが当たり前で……」

「そう、当たり前すぎるから疎かにしてしまっ。思い返しなさい、ユウキが今までしてきた行動を！ どんなに忙しくても毎日ギルドに顔を出して世間話をし、職員の些細な悩みを聞いて知恵を出して良い方向へと進ませようとする。そういった付き合いをすれば顔見知りとなり、ある程度融通を利かせてもいいと思うようになる。それが人情というものですよ」

「そんな程度のことで」

未だに現実を理解できない勇者たちが睨みつけてくるが——ギルド支部長には無意味だった。ギルド支部長は声を荒らげる。

「お前らが見えないところで、ユウキがどれだけ苦労したと思ってるんですか！ どれだけ頭を下げたと思ってるんですか！ その苦勞を考えれば、ユウキのいないパーティなんて順位が下がっても当たり前ですよ！」

「けども、あいつは戦闘に参加してなかったし……」

クズが抜けただけで評価がなぜ下がるのだ？ 未だそう言いたげなベルファストに、ギルド支部長は告げる。

「ユウキの本業は盗賊です。盗賊の世界においては、危険が起きる前に要因を盗むのが肝要。それができることが、最高に腕の立つ盗賊の評価となるのです。だから本来は、別に戦闘に参加しなくてもいいんですよ。実際、あなたたちはこれまで、敵の奇襲を受けたことなどないでしょう」

ベルファストはふと思い返してみた。

確かに、休憩のときも、食事のときも、寝るときも、ユウキは周囲を警戒していた。これまで生きてこられたのは――

あいつのおかげだったのか？

「その顔だと……ようやく理解できたようですね。こちらは仕事が忙しいんですから」

――さっさと出ていけ、と。

そう言いたげなギルド支部長に、ベルファストはすがり付こうとする。

「ちょ、ちよつと待ってくれよ！ 理由はわかった。もう一回ユウキを仲間に入れるから、俺たちの順位のダウンを取り消してくれ」

「どこまで馬鹿なのか？ 彼が一度放り出した仲間を信頼すると思ってる？ 寝言も大概にしなさい。元は6位でしたが、ユウキがいらない今では8位までの仕事しか請けられないようにしますし、依頼の許可も制限します。それから当然ですが、国に訴えても無駄だと断言します」

「なんだと！ 俺らは有力な貴族家の出だぞ！ 支持者も多いんだ。あとで後悔するなよ！」

結局、ベルファストは逆ギレし大声で怒鳴りつけるのだった。

そうして勇者たちは怒り心頭に発して出ていった。

× × ×

「あの馬鹿どもは、どこまで迷惑かければ気が済むんでしょうかね」

ギルド職員が、ギルド支部長リリエットに尋ねる。貴重な時間を無駄にした彼女は機嫌を悪くしていた。

貴族の中には冒険者となって一旗揚げようとする者もいるが、ああいう手合いばかりだった。

「フン、自力では大したことがないくせに大物気取りとは」

あの程度など探せばいくらでもある。ワイバーンぐらいはどうかなるかもしれないが、それ止まりだ。

そんなことより――やつとユウキが自由になれたのだ。

そう考え、リリエットは笑みを浮かべる。

別に彼らがどうなろうと構わないが、先に手を打っておくのがいいか……何やら考え事をしていりりリエットに、ギルド職員が尋ねる。

「例の手紙を出しますか？」

あいつらはあれからまったく変わってない。もうすでに包囲されていることを存分に味わってらおう。ユウキには二度と干渉できないようにしておくほうがいい。

リリエットは考えを整理すると、職員に命令を出す。

「一番速い伝令馬を用意して」

「かしこまりました」

以前から練られていた計画をついに発動するときが来たのだ。

勇者のパーティはリリエットのことをまったく覚えていなかったが、彼女はあのと時のことを忘れたことなどなかった。

あれはそう、リリエットがギルド支部長となるほんの少し前のこと。

第2章 解体の勇者

「リリエットさん、今日はあなたに重大な話がある」

——心して聞くように、と。

「何でしょうか」

人払いした部屋で、私、リリエットはギルド支部長の言葉を待っている。

この頃、私は有力なパーティの一員で、重要な戦力として活躍していた。

心身ともに充実し、同世代で頭一つ抜けた評価を得ていると自覚し、それに応えるように努力も怠らなかつた。

「実はな、とある町のギルド支部長が任期を終えて退職するのだ。人望が厚く町の人からの評判も良い好人物なのだが、いかんせん年齢が年齢で体が上手く動かないそうだな。それで、次の席が決まっていないのだ」

「えっ？ それって」

ここまで話されたら、続く言葉は予想できる。

「君をその席に推薦したいと考えている。どうだろうか？」

「え、ええっ!? でも、普通はその補佐官が引き継ぐはずなのでは？」

私が慌ててその口にする、ギルド支部長は頷きつつ言う。

「そうなのだが、補佐官もやはり年齢を理由に、すぐに引退しようとしているらしい。もちろん業務の引き継ぎはするようだが、あくまで期限つきのサポートであり、有望な人材にあとを託したいとのことだ」

冒険者ギルドでは、基本的に実力主義を採っている。ギルド支部長になれるというのは、私の年齢とキャリアを考えれば出世である。

この話が本当であるのならば、引き受けるのが普通なのだろうか……

「でも、今のパーティが」

ギルド支部長になれば、よほどのことがない限りその場所を離れられなくなる。パーティに所属したままでは無理だろう。

リーダーになんて言うべきか。

「そのことは十分理解している。だがな、君以外に候補者がこの町にはいないのだ。他の町からも候補者が数人選出されているのだが……」

「……すみませんが」

少し考えさせてほしい、と願う。

「できるだけ急いだほうがいい。他にも候補者は多いからね」

そうして私は部屋を出た。

「あーん、どうしようか」

一瞬、担がれているのかと疑ってしまったが、やはりこの話は嘘ではないだろう。でなければ、ギルド支部長は私だけを呼び出したりなどしないはずだ。

「とりあえず、リーダーに話を聞こうかなあ」

私はパーティメンバーがいる宿屋に行くことにした。

「あの……リーダー……」

「なんだい、えらく気弱じゃないか」

何とかリーダーと二人きりの状況を見つけたが、どこか気まずい雰囲気がある。

どう言い出そうか。

「その様子じゃ、重要な話だったんだろ？」

「ええ」

私は、ギルド支部長と交わした会話の内容をリーダーに伝えた。

「おいおい、そりゃ出世じゃねえか。この上なく良い話だぜ」

早く受けると返事しろ、そうリーダーに言われるも私は悩んでいた。

「でも、私がパーティを抜けると戦力が下がりますし、パーティの順位だつて下がるかもしれないし」

私は平凡な魔術師に過ぎないが、それでも結構強い術を多く使える。他のメンバーも歴戦の猛者で構成されており、隙らしい隙などない。

私が抜けたあと、パーティに誰を入れるのか心配なのだ。

私が悩んでいると、リーダーが力強く言う。

「受けるんだ」

「でも」

「俺のことなら心配するな」

「ですが」

「いいか？ お前くらいの年でギルド支部長の席が回ってくるなんて、普通じゃ考えられない。それだけお前の才能が買われているんだ」

「……」

「俺も思うところはある。あるが、お前さんは着実に結果を出してきた。それが今、実を結ぼうとしてるんだ」

これ以上良い話などない。メンバーのことは何とかするから、すぐに答えを出せと。

しばし沈黙して考える。

「決意しました」

——この話を受けると。

リーダーは笑みを浮かべて口を開く。

「よし、決まったな！ 実はもうすぐヒュドラ討伐の募集が出されると聞いている。それをギルド支部長へ手土産として持っていけば、他の連中も黙るしかないだろうさ」

ヒュドラは古来大物の討伐対象とされており、数組のパーティで挑むのが定番だ。ちょっと心配になったので、私は尋ねる。

「他は誰が」

「目ぼしいのは出払っているから戦力としては厳しいな。ああ、そうだ。外部から勇者のパーティが来るらしいぞ」

「勇者」という名前や評判はともかく——

あまり期待できなさそうだと感じた。馬鹿な貴族の子供などが、勝手に勇者を名乗っているだけだとか、私もそういう連中を結構知っているのだ。

× × ×

その後、噂通りヒュドラ討伐の依頼が出される。

参加したのは四組であった。

まず、それぞれ挨拶することになったのだが……

「俺は剛剣の勇者ベルファスト様だ！俺らにかかれば、ヒュドラなぞ大した敵ではない！」
なるほど、期待できる奴らではないことは確かであろうだ。

ベルファストは馬鹿みたいにピカピカした装備を着込んでおり、眩しすぎて気味が悪かった。

他の連中も無駄に輝く装備でゴテゴテである。舞踏会に出たり王様に謁見したりするつもりなのだろうか。

だが、一人だけ雰囲気の違い者が交じっていた。

この大陸において黒髪黒目は珍しく、その人物がまとう装備は使い込まれていた。明らかに他の勇者どもと異なる。

私は勇者の一人に尋ねる。

「あの方は？」

「あいつはユウキ。他の世界から呼ばれたはみ出し者さ。解体作業とか料理とかしかできないゴミだよ」

その返答を聞いて私は、逆に勇者のパーティに少しだけ興味を持った。

こいつらは解体の重要性を理解していないが、モンスターの討伐はモンスター自体を倒すことよ

りも、その後の作業に手間がかかるのだ。素材を切り出すときにナイフの入れ方を失敗すると、素材は台無しになってしまう。

素人と熟練者の手掛けた解体では、ただのウルフの素材でも値段が大きく異なる。モンスターしだいでは桁が一つ違うことも珍しくない。

私たちのパーティでは全員がそここの解体技術を持っているが、解体専門の者さえ確保していた。

(このユウキという人物は、どれぐらいの技術を持っているのだろうか?)

私以外にも、ユウキに注目しているようだった。

複数のパーティで行動する際、最初にするのはアイテムのチェックだ。

ヒュドラの毒は強力なので、専用の解毒薬がないと生存率が低くなる。なので今回は、これを所持しているかを先に確認しておく必要があった。

「こっちは用意できなかった」

「こちらもだ」

他のパーティも持っていないようだったが、私たちも同じだ。

治癒魔術を使うと魔力の消耗が激しく回復に時間がかかる。高額であるものの、持っていて損はないアイテムだったのだが。

「そんな保険など無用だ！ さっさと狩りに行こうぜ」

空気の読めない勇者たちが叫び出す。

こいつら、この話の重要性を理解しているのか？ 死人が出てもおかしくない相手なのだぞ。結局、勇者のパーティのアイテムチェックはできなかった。

そのまま出発することになった。

そうしてしばらく歩いていくと、ボアが二頭向かってきた。この人数ならば仕留めるのは容易いはずなのだが……

「ダラララ〜！」

ここで勇者組が、周囲のことをまるで考えない攻撃を繰り返した。

(この馬鹿どもが!?)

盾役はひたすら意味のないガード。剣の攻撃は周囲の味方まで巻き込む。魔術師はへぼっちい魔術を連発している。

予定よりも大幅に時間がかかって、何とか倒した。

だが、彼らはこっちに向かって――

「サポートできない」

「無駄な連中ばかり」

あるうことが、暴言を言ってきたのだ。

私は怒りが爆発しそうになる。

「申し訳ない」

対して頭を下げたのは、ユウキだった。

そんなユウキに、勇者のパーティの怒号が飛ぶ。

「おい、ユウキ！ さっさと獲物を解体しろ！」

「承知した」

私はユウキ以外の勇者たちに憤りを抱きながらも、ユウキの解体の手際を見ることにした。

勇者どもが勝手に休憩するのを横目に、ユウキは解体に取りかかる。

その手際はすごかった。

(……うそ)

獲物の解体はなまぐさく周囲を汚すものだが、ユウキの解体は違った。

三本の本を組み合わせたようなものやら何やらを出すと、たった一人で二百キ口はあるボアを吊るし上げてしまっ。

そして、その下に大きな穴を掘り、解体作業を一人で始めた。

(恐ろしく早いうえに、まったく無駄がない)

大量の血と内臓を穴に落とすと、水を注いで血を流す。それからナイフを手足の先の各所に入れ、筋に沿って皮を剥いでいった。

その早業は、今まで見たことがあった解体とは完全に違っていた。素早く皮を剥ぎ、毛のほうを下にして、肉を切り分け始める。脂身など unnecessary 部分を取り除いて、食べられる部分だけをすぐさま取り出す。

「……き、綺麗」

見ていた全員から、ため息が漏れる。私も解体作業の現場はよく見るが、大抵は汚れてしまうし、ここまで効率的にできない。

ユウキの解体には、いつさいの涙みがなかった。

あつという間に一体目の解体作業が終わる。

「おせえよ！ もっと早くザクザク切り裂きな！」

様子を見に来た勇者の一人がユウキを叱責する。

ユウキがどれだけすごいことをしているのか、こいつらが理解するのは不可能だろうな。

二体の解体を終え、分配することになったのだが……

「こっちの取り分は六割だな」

こいつらの発言は、私の感情を逆なでしかししない。

普通、解体をやった者に二割が妥当だ。ユウキが所属するパーティとはいえ、六割の取り分は過剰だ。さらにこの六割も自分たちのものにして、ユウキには相場の二割も渡さないつもりだろう。

私は、こいつらの頭をどつき回したくなってきた。

こいつらは話し合う必要がないほどだめだ。たぶんヒュドラ戦ではパーティの連携を大きく乱す要因になるだろう。

何でこいつらにユウキが付き合っているのかを、しっかりと聞いておく必要があるな。

「ユウキ、ちょっと」

「何か用」

勇者たちが休んでいるのを見計らい、ユウキを呼び出すことにした。他のパーティのリーダーも呼んでいる。

「何であなたのようなでできた人が、あんな馬鹿どもの面倒を見ているのですか？」

時間がないので、直球な言葉で切り出してみた。

すると、ユウキはゆっくりと話し出す。

「そうですね……身寄りもおらず、信頼できる人もいない世界に連れてこられ、従うほかなかったのです」

訳がわからなかった。

その後、ユウキは丁寧に説明してくれたが、やはりよくわからない話だった。

「つまり、ことはまったく違う世界から来た……のですか？」

話としては面白いかもしれないが、本当だとしたらどれほど恐ろしいことかと思う。